

## 遠のくシベリア

### 抑留生活の思い出

和歌山県 古久保 秀夫

本籍、和歌山県日高郡上山路村西四四三番地。農業、古久保椿三郎の三男として大正十四年三月四日生まれる。兄は二人とも夭折したので家督を継ぐ。昭和十四年三月、東尋常高等小学校卒業。四月、千代田精工尼崎へ事務員として入社。昭和十七年十一月、退社して渡満す。同年同月二十七日から満州国軍第五軍管区司令部へ軍属として就職、熱河省承德勤務。昭和十八年十二月、陸軍航空兵器廠經理部へ転属し奉天に駐屯す。昭和二十年五月十七日現地召集され、歩兵として海拉爾はいらうの満州第五一五部隊で初年兵訓練を受ける。装備は三八式歩兵銃一挺だけ。

二十年八月九日、ソ連の不法侵攻により開戦となり、対戦車攻撃用「たこ壺障地」の構築に当たり穴掘り作

業が続いたが、戦闘はしなかった。八月十四日、部隊は列車で南下し哈爾浜で展開中に終戦し、武装解除を受け、飛行場に集結監禁され、十月末ごろ作業大隊の編制があつて、新しい大隊ごとに宿営した。

十一月に入つて移動が始まる。鉄道輸送は貨物列車六十両くらい、連結の長い列車だったが、一両に五人割り当てで詰め込まれた。途中停車駅での「飯揚げ」の掛け声で、一斉に下車して用便を済ませるのが習慣になつたようである。停車中の貨車の下のリール脇へ尻を並べてのことである。先行部隊が落とした物は凍つて迷惑しないが、落とし紙が吹きすさぶ寒風で舞い上がつたり吹き寄せられたりして、レールに沿つて慌ただしく移動していて、時には攻撃を受けることもあり、奇観であつた。一応汚れたものであるが、汚感はなかつた。ただ思ったことは、列車が止まるごとに同様の場面に遭遇するので、同邦部隊が先行しているという少しの安心感さえ感じた。

バイカル湖を回つて最後のころ、輝く氷の山が湖畔に神々しく映っていたのは、凄く雄大な景観であつた。

貨車内のダルマストーブの燃料の薪の拾い集めには随分苦勞させられた。

シベリア奥地へ送られているからますます帰国の見込みは立たない。この美しい風景は二度と覗けないのではないかと、戸の隙間から外を覗き見したが、貨車内に吹き込む風は痛かった。寒いので毛布、防寒外套も全部着込んで、ひたすら臥して体力の消耗を防いだ。支給食は非常に少量で、飯盒の掛け盒一杯やつとくらいが続くから空腹の連続であった。時々警戒兵が見回りに来て、時計や万年筆などを物色して掠奪されるが続いた。おおよそ一カ月近く貨車住まいをして様子が慣れてきたときに引込線で停車した。朝食後直ちに下車させられ、雪中行軍させられた。

半日近く歩いて林の中にある収容所に到着した。入口に門が作られ、観音開きの有刺鉄線張り、柵は二枚で五メートルくらい開いており、十数名の兵士が並んでいる。衛兵所は中央出入り口で、収容所四隅に望楼が建っていて自動小銃を抱えた兵が一人ずつ立哨監視しており、望楼を繋ぐ有刺鉄条網は数列、外側に電気

柵が設けられていて警備は嚴重であるが、林の中に建物らしいものが見当たらない。

営門を入って進行中に、盛土の上に板で四角に囲った換気穴の小屋根が三基ばかり並んでいる防空壕を思わせる土盛りの正面に、四角な木枠が埋め込まれていて、その枠を支えた縦横各三メートルくらいの通路が見え、両壁は雑木丸太を建て込んで土壁の崩れを防いでいる。

入口は、二枚折り観音開きの板張り戸が内側へ開かれている。枠も取っ手も丸木作りだ。入口の扉から二メートルくらい進むと地下への階段で、雑木丸太を踏み段に、七段降りると踊り場が三メートルくらいあって次の扉がある。次の扉は丸太枠で腰板張り、麻袋を裏表に綴りつけてあり、前後自在開きだ。扉を開けて二メートルくらいの踊り場からさらに階段を七段くらい降りて地下室の入口扉がある。三つ目の扉も丸太造りの枠で腰下は板張り、上半分は麻袋を両面から綴りつけた木製自在開きである。昇降口通路の内側は暗い空間で異臭が鼻を突き、気分が悪くなる闇の世界で

あつた。屋内に次から次へと押し込まれて狭い通路へ  
詰めに立ち、足踏みしながら前へ詰めたが、足許も  
見えなくてどうなることかと不安であつた。

しばらく時間が経つて闇に慣れるに従つて室内の模  
様が、近い所だけ分かるようになった。中央通路幅が  
三メートルくらいあり、両側に一メートル二十センチ  
くらいの支線が分かれ、支線の間には長さ二メートル  
の寝台が二列ずつ拵え付けてある。寝台は、小丸太を  
二つ割りにした材料を並べた棚の二段造りで、棚上は  
一メートル二十センチくらいの座れるだけで、通路上  
に小さな裸電球が下げてあるが、出入口の目印くらい  
の明るさである。造り付けた鎧窓が三カ所あるが室内  
発散の臭気抜きで、中央にはドラム缶の暖炉が一基据  
えてある。追々に寝台の割り振りが進んで、各人が荷  
物を下ろすまでに一時間余りも要した。自席が決まっ  
たが、一人分の席は四十センチで動きが取れないから  
交互に頭を向けて寝るが、寒さに震えて眠れない。

収容所に入つても給与は改善されず、少量の粥カス  
ープと小さく切つた黒パン一切れが一日分で、頗る空

腹の連続だから全身がダルかつた。

収容所の使所は、三つの扉と出入口の階段を登つて  
五十メートルくらい離れた所に屋根だけの建物であり、  
周囲は腰壁が一メートル五十センチくらいの板張り  
で上は吹き曝しである。便壺は深さ三メートルくらい、  
幅五メートル、長さ十二メートルくらいの素掘りの上  
に、三メートルくらいごと丸太を伏せた上に幅三十  
センチくらいの厚板を壺の上、中央よりに間隔二十セ  
ンチくらいで三列ずつ対称に敷いてある。中央へ縦に  
手摺り木が高さ五十センチくらいに一本ずつ、計三本  
が落下防止用に設けられている。

外側の広く開いた壺は汲み取り口である。四方の出  
入り口が広く開き風通しよく、六列の板の上に並んで  
排便しながら世間話をする最も落ち着く場所であつた。  
小便は、外壁の内側へ縦方向に板を斜めに受けた小便  
所があるので、押し合いながら放列を敷く。夜の便所  
は宵から朝まで人出が多かつた。寒さで寝つかれない  
から一晩に三度も四度も通う。そのため往復にまた冷  
えていよいよ眠れず、暖まる暇もなく睡眠不足になり、

元気が出ない悪循環が毎日続いて困った。

作業割りで一番先に割り当てられたのが製材所の雑役であった。徒歩で約三十分くらいの距離で、主な仕事は引込線に入った貨車から丸太の荷下し作業だったが、これが大変で、貨車が入るのが不定期だから夜中の二時、三時ころに呼集の掛かることが度々あって、まことに気が重いことであつた。

眠いので、前を行く人の肩に手を載せさせてもらつて、居眠りしながら行進することも再三あつた。大型の無蓋貨車へ山積みで入荷した原木は六メートルから十メートルもあり、直径一メートルを超す大喬木もあつて、荷下しは引込線から二メートルくらい低い広場へ転がし落とす仕事で、蟻が芋虫に挑戦するようになかなか大木は動いてくれない。一斉に徒手で押し転がそうと努力しても、足場と押す角度の確保が難しく、徒労が多く、掛け声だけでは丸太は動かない。苦勞してやつと一、二本落とせたが、寒中なのに汗びっしょりでもとても苦しい。一息入れてから続けようと立ち止まると、監督に來ているデブの大男が口やかましく怒

鳴り立てるばかりでなく、棍棒を持って來て丸太や貨車の台を叩いて大きな音を立てて熊のように歩き回りながら威嚇されるので休めず、丸太押しを繰り返すが、そのうち要領を覚えて、梃子の応用で棍棒を上手に使うように工夫を重ねたので、次第に能率が上がったが、彼らの言うノルマには届かないのか、一向に食糧は増やさず疲れるばかりであつた。

製材所では、荷下ろし作業のないときに掃除をして屑木を集めて焼却するのが一番人気の作業であつた。交代で焚き火のそばへ行つて暖をとつたが、とにかく足から冷え込むので常に足踏みをしなければ足先が痛くて耐えられなかつた。もちろん手も肩も冷えて辛いが、足が一番辛かつたので焚き火は御馳走でした。

一切れの黒パンと薄いスープでは力が出ない。次第に痩せ細り、顔色も青黒く生気を失つた隊員ばかりになつて、皆が体全体が痛いと訴え合つた。特に年配者の衰弱が早かつた。

隣席と近くの席の四十年配の人、二、三人が病みつき、二人は入院先で、一人は自席で冷たくなつていた

から大騒ぎして医務室に運んだ。自分も昭和二十一年春の雪解けが始まるころから体調が悪く、急速に体力が弱まり、歩行中によく躓いて転ぶことが多くなり、夜の便所通いが苦痛なので診断を受けたら、明らかに栄養失調であると言われ、戸外作業免除のC級になりました。それで所内作業の縫製班に編入されることになりました。縫製の仕事は、作業隊員が修理に出した軍服や襦袢、袴などを洗濯班が洗濯乾燥し回送してくるのを一枚ごと、弱った部分を切り取り、布を当て一針一針丁寧に修繕して隊員に戻すのです。一日中座っているから、休憩時間には柔軟体操での凝りほぐしを要したが、とにかく酷寒や暑さに耐える必要がなく体力は次第に回復の兆しあり、二年目の冬は酷寒に曝されずに越せたからようやく命拾いができたが、皆無口になり、沈み込みがちの毎日であった。

雪解けとともに帰国列車に乗せられナホトカに送られたが、往路と違って一週間くらいで着いた。ナホトカでは幕舎に収容されて作業はさせられなかったが、民主教育の講演を聞いたり、労働歌を合唱しながら腕

を組み合せてデモ行進の練習を毎日やらされた。この空気は変わっていた。入浴があつて着衣を全部着替えたから、作業隊から解放された気分になった。

所持品検査は幕舎の出口で、一人一人嚴重に行われた。図書、手帳など一切没収されたと聞いた。昭和二十一年五月十九日に引揚船「恵山丸」へ岸壁から渡し板に足をかける直前に氏名改めがあり、氏名を呼ばれた者だけが乗船できた。名前を呼んでもらえなかった者が男泣きしながら残されるのが哀れであった。どんな手違いか、不運がここで発生しようとはだれも考えなかった事態であった。どうか次の船に是非乗って帰れよと祈るのみであった。このことが我が身に当たっていたらと思ひ、背筋が寒くなった。

舞鶴に上陸して引揚げ手続をしていたら、同郷の寒川庄太郎君も恵山丸で帰ってきていたことを知って喜び合い、同伴して帰郷した。

復員後は、故郷の先輩たちの指導幹旋を受けて、農協職員、農業共済組合職員を経て村吏員となり、定年退職後は自給自足農業に専念している。

遠い昔の思い出を手繰って思うことは、寒さと飢餓に倒れて逝った人々のご冥福のため「遺骨帰還を」の事を遂げてほしいと願う。

万死を乗り越えて生還できた身の幸運に感謝しつつ、引揚船内で台頭した「艱難に耐えられる修行を了えた再生だ」という自負は、引揚げ後の耐乏生活を凌ぐ人生訓となっている。

なお、収容されていたところの地名や収容所名は収容所にいる間は教えられなくて、ナホトカに来てから教えられたように記憶している。

外部との交渉は全くないといえる状況で、作業監督の大声で怒鳴る声が印象深く耳について夢にも現れることもあったが、近ごろはそれもなく、寒くひもじいシベリアが遠のいてしまつて思い起こせなくなつてきているのも情けない話だ。

## シベリアに抑留されて

和歌山県 山本良市

本籍は、和歌山県日高郡龍神村大字三ツ又七十番地。生年月日は大正十二年一月九日である。

父、山本音吉と母ハナエの長男として出生し、昭和十二年三月、龍神村尋常高等小学校高等科を卒業し、自営農林業に従事中、昭和十七年八月中旬、徴用令により、名古屋市港区大江町三菱航空機工場で約一カ月の訓練を受けた後、部品製造の徴用工として夜勤、残業、徹夜の明け暮れだった。

昭和十八年の徴兵検査では、左耳難聴で一乙合格。

昭和十九年八月一日、現役兵として浜松第七航空教育隊に入隊して、満州第二十六教育飛行隊に転属。八月九日、夜汽車で浜松を出発して、八月十一日夕刻博多港から乗船し、夜間航行で玄界灘を渡るが風波高く、船倉では船酔いに苦しんだ。立哨当番で甲板に立った。